



自腹で持ち込んだ医療機材を使い、高度な眼科手術を施す。
○長岡洋幸



○小林淳

服部匡志 (はっとり ただし)

1964年大阪生まれ。京都府立医科大学卒業後、大阪、京都、熊本、福岡、静岡など各地の病院で経験を積み、2002年にベトナム国立眼科病院の網膜硝子体手術指導医として渡越。以降、現在まで、ボランティア医師としてベトナムをはじめインドシナ半島の多くの人たちを失明の危機から救う一方、現地で若手医師の育成に努めている。2007年、ベトナム保健省より「人民保健勲章」を叙勲。2013年、日本政府より「外務大臣表彰」を授与。



ベトナムで診察する服部医師。威圧感を与えないためにYシャツ姿で。
○長岡洋幸

アジアの人々1万人に光を与えた ベトナムの赤ひげ先生

まだまだ貧しい人も多いベトナムで、高度な技術を伴う網膜硝子体手術の指導医として多くの人たちを失明の危機から救っている服部匡志医師。月の半分は日本でフリーの手術医として活動し、そこで得た資金を元にベトナムで無償奉仕する生活をすでに十数年。手術費を自ら肩代わりしてまで患者さんを救う現代の赤ひげ先生に話をお伺いした。

あの医師を見返してやる

高校二年の夏、父親を胃がんで亡くしました。そのとき、ふと耳にした医者さんの一言で人間不信に陥り、何もかも嫌になって「家出」しました。夏休み最後の日、十万円を手に北海道に放浪の旅へ。その間に出会った多くの人たちの優しさが少しずつ閉じた心を開いていくてくれました。そしてこのままではダメだと思い、一カ月後、「あんな医師が医療に携わっているのは日本がダメになる。患者さんのための医療ではない。僕が医師になって変えてやろう」と学校に戻り、医学部をめざします。

とはいえ、それまで文系志望、しかも家出中のブランクは大きく、授業にもついていけず、赤点の嵐。そんなとき先生が「二浪すれば大丈夫や」と。普通通それは、「あかんから、志望を変えろ」と言われたと受け止めます。でも僕は、「二年間頑張れば医学部に行けるんかあ」とポジティブに解釈。勉強を開始しました。

一人の眼科医の人柄に惚れた

結局 紆余曲折を経て京都府立医科大学に入ったときには二十二歳。学力的には二浪時がピークでしたが、人生なかなかうまくいきませんね笑)。えらい回り道したなあと思いましたが、遠回りしたからこそ巡り会える人生もあります。医学部6回生のとき眼科の教授になったばかりの木下茂教授との出会いもそうです。消化器外科志望でしたが、その人柄に惚れ眼科医を目指し、それが後のベトナム行きにつながるのです。研修医時代は自作のノートを作り、1回の手術ごとにうまくいかなかった反省点を書きとめ、毎日それを寝る前に読み返し手術の勉強を一生懸命行いました。その後、地方の病院で武者修行を重ね、内視鏡を使った網膜硝子体手術では世界トップクラスの技術を身につけました。

そんなとき学会で一人のベトナム人医師に出会い、「失明している人が多く、ぜひともあなたの技術で救ってほしい。またベトナムの医師にその技術を教えてほしい」と言われたのです。

結果を出すことがすべて

役所で福祉の仕事をしていた父親の口癖は「人の役に立つ仕事をしろ」。その言葉を常に胸に秘めていたので、即座にベトナムへ行ってみたい」と思いました。しかし、現実の壁は厚く、まとまった休暇をもらえず、勤務先の病院を辞めることになりました。今までの安定収入を捨て、無報酬のボランティアで行くわけですから妻も不安だったはず。あげくに給料もあまりないのに、マンシヨンの頭金として貯めていたお金で高額な手術機材を買うことになりました。

ベトナムではスタッフとのバトルの連続。言葉も文化も違い、こんなところでやっていけるのかな...と。急患の有無にかかわらず手術は午前中と午後の二時間だけ。昼休みは昼寝付きで、四時半には仕事を終わらせてしまふ。これでは多くの患者さんの治療ができない。なんとかしなければと、今までのやり方を頭ごなしに否定して「こうやらあかん」と

言っても、返ってくるのは反発だけでした。そんなとき、どうみても手遅れの少年が来院。病院全体がしりごみするなか、必死の努力で何とか手術を成功させ、少年の目に再び光を取り戻しました。それ以来、スタッフの僕を見る目が少しずつ変化。みんなを納得させ前に進めるには、自ら率先して働き、困難に立ち向かい、それが患者さんにとってよい結果を生むことを示すしかありません。

あきらめない人生を信じて

はじめはほんの三カ月の予定が、気がついたら十年以上が経っていました。ひと月の半分は日本でフリーの手術医として資金をかき、残り

の半分をベトナムで過ごすというスタイルは今も変わりません。現在は現地の若手医師が育ってきたので、週末は「チーム服部」で地方に行き、貧しく病院で治療を受けられず白内障で失明している人たちに、無償手術のプロジェクトを立ち上げ、毎月いろいろな場所に行きます。片道8時間以上という場所も。患者さんも100人以上。この地方行脚は医療器材をハノイから持ち込み、荷物も小型トラック1台分。顕微鏡の組み立てや手術の準備などすべて医師が行わなければならない、超ハードですが、メンバーは誰も愚痴を漏らしません。チームの活動範囲が広がり、多くの人が失明の危機から救えるようになりました。同時に、手術数が多くなると必要な医療器材の量も経費も格段に増えてきて、僕の日本での稼ぎだけでは賄いきれなくなってきました。そんななか、ミャンマーからも網膜硝子体手術の指導をしてほしいとの要請がありました。でも、浪人時代に学んだ「回りを道にしてもあきらめなければ必ず何とかなる」という精神は今も僕の中に生き続けています。あきらめない人生は、必ずいい出会いを生んでくれると信じて、志はいつも大きくもつようにしています。

ポイント(永久不滅ポイントまたはUCポイント)で、失明の危機にあるアジアの人々を救えます

服部匡志先生の活動に共感した有志が発足した「アジア失明予防の会」に、ポイント(永久不滅ポイントまたはUCポイント)を使って寄付できます。同会では、ベトナムを中心とした、眼科医療が未発達のアジア諸国に対してチャリティー手術や医療機器提供の支援を行っています。

「アジア失明予防の会」について詳しくは www.asia-assist.or.jp

*詳しくはP98をご参照ください。



○長岡洋幸